

社説

A clean slate

米国エネルギー省長官スティーブン・チュー博士

Nature Vol. 462(957)/24/31 December 2009

ノーベル賞物理学者で米国エネルギー省 (DOE) 長官の Steven Chu 博士が、*Nature* の「2009 年 話題の人」に選ばれた。彼は今、問題が山積する米国のエネルギー技術の再構築に向けて強いリーダーシップを発揮しており、マンハッタン計画などを例に出して米国の科学者と技術者を鼓舞している。隠された標的の 1 つはエネルギー技術先進国日本と思われ、DOE および Chu 長官の動向には目が離せない。(ND 編集部)

Steven Chu 氏は、レーザーで原子を捕捉する巧妙な「光ピンセット」技術の開発者で、1997 年にノーベル物理学賞を受賞した。彼は卓越した実験科学者であり、実験室で難問に取り組むことが大好きだ。しかし 5 年前、ローレンスバークレー国立研究所 (米国カリフォルニア州) の所長に就任し、同研究所をクリーンエネルギー研究に特化させるという、かなり大きな課題に立ち向かうことになった。その後、2009 年 1 月に米国エネルギー省長官に就任し、現在、世界最大の経済大国のエネルギー供給を変革する責務を負っている。*Nature* は、こうした理由で、Chu 氏を「2009 年 話題の人」に選んだ (*Nature* 2009 年 12 月 24/31 日号 978 ページ参照)。

Chu 氏は既に大きな影響力を発揮している。彼の地位はオバマ政権のトップに近く、米国が温室効果ガスの排出量削減を約束するうえで力を尽くしている。それは、地球を守るためだけでなく、芽生えつつあるグリーン経済において、中国、インドやヨーロッパ諸国と確実に競争していけるよう米国を変えるため、でもある。

Chu 氏の下、エネルギー省は、より高いリスクを伴うクリーンエネルギー研究を重点的に進める方向へと踏み出した。短期的利益に照準を合わせざるを得ない産業界の支援を得るには、現在の商業性は薄くとも将来有望な技術の開発については、政府の研究プログラムによって進めるのが正しい姿である。もはや地球温暖化問題は、単純な各国の規制で切り抜けることが難しくなっており、温室効果ガス排出量の削減を実現するには、科学者と技術者が、より低コストで、環境汚染が少なく、高効率でエネルギーを生産・供給する方法を開発しなければならない。

このため Chu 氏は、クリーンエネルギー研究を応援する公的部門のチアリーダー役を自らに課した。彼は米国各地を訪れ、現代の最高の知性は、社会が直面する最大課題と思われるクリーンエネルギー研究に取り組む必要があることを、高らかに訴えた。趣旨に賛同する数人の

トップクラスの科学者が、既に自らの専門分野を離れ、Chu 氏と同じくエネルギー問題に傾注している。

こうした公的な役職に就くことは、科学者の間では、長年の名誉ある伝統となっている。したがって、Chu 氏が *Nature* の「2009 年 話題の人」に選ばれたことは、一時的にせよ永続的にせよ、研究生活から離れて社会のより大きな問題に取り組んでいる世界中の数多くの科学者に対する賛辞、応援歌である。

Chu 氏は、長官就任後の 1 年間、苦勞を重ねてきた。政府で主導的役割を果たす科学者は、Chu 氏のように傑出した研究者ゆえに選ばれることが多い。しかし、公共政策や政治の場で確実に成功するには、コンセンサス作りや当事者が受け入れられる妥協策を考え出すことがカギになる。実験室で最重要とされる技能だけでは十分でないのだ。Chu 氏も既に学びつつあるように、政府の要職に就く研究者は、適応能力を身につけ、政治指導者から学ぶ必要がある。

一方で、科学者は、政治家がより科学的な思考ができるよう手助けすることができる。また、政治家がイデオロギーに従ったり、政治的な方便に頼ったりするだけでなく、研究結果を注意深く調べるよう働きかけることができる。Chu 氏は、立法府の議員、特に地球温暖化を問題視していない議員との会合を意欲的に重ね、気候変動の科学、気候変動を無視することの影響について、各議員に説明している。そして、こうした活動を通して、米国のエネルギー部門の環境汚染削減をめざした気候関連法案を、議会通過させたいと考えている。

1 人の科学者が、長年にわたって気候関連法案に反対してきた数多くの政治家を動かせるというのは、甘い考えかもしれない。しかし、Chu 氏の活動は、法案通過へと流れを変え、究極的には気候に関する国際条約の批准に結びつく可能性を秘めている。論理とデータを尊重する議員は、Chu 氏の活動を精力的に支援すべきである。(菊川要 訳) ■